

## 1960～70年代に見られる芸術表現の研究拠点形成と資料アーカイブの構築<sup>1</sup>

Formation of Research Hub and Archiving Materials for Art Study in 1960s-70s

伊村 靖子 (IAMAS講師)  
IMURA Yasuko (IAMAS)

### 研究の背景

本研究は、1960～70年代日本の美術資料を文化資源として捉え、調査研究を行うことにより、美術史と周辺領域との接点を検証し、戦後日本の芸術表現史の枠組みそのものを問い直すことを目的とするものである。その背景として、60～70年代の芸術表現は、美術、デザイン、音楽、映画、テレビ、アニメーション等の領域横断的な試みと、イベントやパフォーマンス、インスタレーション等の多様な活動によって特徴づけられる。これらの表現は一過性の形式であり、オリジナル作品が現存しないことが多く、したがって記録としての資料の調査が研究上重要な意味を持つ。特に70年代には自主的なメディアを活用した表現活動がさらに活発化していくことから、資料は単なる「記録」以上の意味を持つと考えられる。とりわけ、概念芸術の展開において、雑誌、写真、フィルム、テレビ等のメディアが果たした通信媒体としての役割とは何であったのか、そして、複製による表現の特質について議論したいと考えた。

本研究のもう一つの特徴は、従来の所蔵作品管理・図書管理等の枠組みに依拠しない美術資料の体系的な収集・保存へ向けたケーススタディとしての位置づけにある。国立新美術館において、「精神生理学研究所」関連資料の受入れから目録作成へ向けてのディスカッション、概念芸術のコンテキストの再配置を通じて、美術史の基礎研究のみならず同時代の社会・文化との接点を明示することを目指した。

### 「精神生理学研究所」研究と各論考の位置づけ

「精神生理学研究所」とは、1969年から70年にかけて、稲憲一郎、竹田潔、島村清治の呼びかけによって行われた表現活動である。この活動は、当時、東京造形芸術大学の学生であった稲憲、竹田、島村によるもので、各表現者が存在する場所を研究所とみなし、東京研究所（稲憲一郎）を拠点に、新潟研究所、茨城研究所、群馬研究所、モロッコ研究所、長野研究所等の各拠点の作家、参加者<sup>2</sup>に呼びかけ、以下の手順を経る。

- (1) 各拠点より、決められた日時 of 行為（あるいは無行為）に関する「データ」（手稿、印刷物、写真、オブジェ等の原資料）を東京研究所宛に郵送。
- (2) 東京研究所でゼロックス等の複製技術によって「データ」を紙に複写。
- (3) 2の複写物をトレーシングペーパーの帯で研究所ごとに束ね、「精神生理学研究所」という活字風のレタリングをほどこしたトレーシングペーパー製封筒におさめる。これを「原本」と呼ぶ。
- (4) 再び各拠点へ郵送。

この活動は、1969年12月7日15時00分の「第1回精神生理学研究所」を皮切りに、1970年1月4日12時00分、2月8日12時00分、3月8日12時00分、4月12日12時00分、5月10日12時00分までの6回（第一次）および5月10日12時00分以降を含め全7回にわたり続けられた。こ

1 科研費15K02129、研究代表者：伊村靖子、研究分担者：鈴木勝雄（東京国立近代美術館主任研究員）、松井茂

2 拠点は全部で16ヶ所ある。東京研究所（稲憲一郎）、新潟研究所（堀川紀夫）、茨城研究所（江面駿）、群馬研究所（島村清治）、モロッコ研究所（和田秀夫）、長野研究所（竹田潔）、広島研究所（斉藤俊徳）、前田研究所（前田常作）、前山研究所（前山忠）、出口研究所（出口皓一）、松沢研究所（松沢宥）、糸井研究所（糸井貫二）、明石研究所（明石晋）、東野研究所（東野芳明）、永井研究所（永井武生）、斉藤研究所（斉藤よしあき）。

これらの一連の活動を、彼ら自身が「不可視的美術館」と形容したことからは、アンドレ・マルローの「空想の美術館」からの着想が窺える。「精神生理学研究所」は、同時代の美術制度への投げかけとともに、美術とインフラ、美術と都市との関係を浮かび上がらせる記録でもある点が独創的である。

「精神生理学研究所」を同時代の芸術の文脈に置き換えるならば、メール・アートとしての側面、ゼロックス等の複製技術により独自の表現媒体を構想・実現した点に注目できる。当時日本で普及し始めたゼロックスや青焼きで手稿、印刷物、写真、オブジェ等を複写するというプロセスにおいて、あらゆるものの質感や意味を複写後のテクスチャーに還元した状態を、作品とみなした点に特徴がある。ゼロックスによる芸術表現の系譜については、成相肇が本紀要に論考を寄稿している。

加えて、表現形式自体の提案である点や、各地で同時多発的に行われることを可視化する試みという点では、情報デザインにも通じる要素がある。これらの点に焦点をあてた拙稿として、「精神生理学研究所」——メディア論としての作家表現『NACT Review 国立新美術館研究紀要』第4号（2017年12月）108～119頁がある。

さらに、郵便制度を利用し、自主的なメディアによって新たなネットワークを構築した点から、同時代のコミュニケーション運動をはじめとする共同体の議論の中に、彼らの活動を位置づけることができる。鈴木勝雄は本紀要において、70年前後を政治の季節の転換期と捉え、芸術表現とカウンター・カルチャーの動向を関連づけた言説研究を寄稿している。

### 「精神生理学研究所」関連資料の内訳

同資料は、2015年4月に稲憲一郎より、国立新美術館に寄贈された。その内訳は以下の通りである。寄贈時の原秩序を尊重し、資料相互の関連性をできる限り損なわないように所蔵することにより、「精神生理学研究所」の活動および稲個人の活動、人的なネットワークが見える状態を心がけた。あわせて、鈴木勝雄とともに稲に対して行ったインタビュー「美術資料をめぐる回想 稲憲一郎氏に聞く——「精神生理学研究所」(1969～1970年)を中心として」を、『NACT Review 国立新美術館研究紀要』第4号（2017年12月）318～332頁に掲載した。

### 「精神生理学研究所」関連資料

#### ①精神生理学研究所資料（1969～2009年）

- ・原資料（第1～6回、精神生理学研究所・以降）
- ・原本（第4～6回）
- ・トレーシングペーパー製封筒
- ・呼びかけ書
- ・通信物（封筒、手紙類）
- ・額装（第1～6回）\*2009年6月1日～6月6日のギャラリー檜での展覧会「1960-1970 精神生理学研究所」の際に額装された資料
- ・『精神生理学研究所』（復刻版）1部
- ・『1969-1970 精神生理学研究所』（封筒を含めた再現版）1部
- ・『1969-1970 精神生理学研究所』CD-R（3枚組）1枚
- ・DVD1枚（復刻版の画像、私家版）
- ・額装展示風景の参考資料

#### ②稲憲一郎氏個人の作家活動に関する資料（1969～1973年）

##### art & project関係資料（1969～1972年）

- ・『art & project bulletin』17、20、21、22、25、26、27、28、29、30、31、32、33、34、35、36、37、38、41、42、43、47、48、49、50、51、52、53、54、56、61、62号、「catalogue of our bulletins」、「art & project announces the publication of a booklet containing twenty works of Lawrence weiner in english and dutch」、「please take due note of our new address and telephone number」、「a sculpture by richerd long will be exhibition at art & project from july 17 until august 6, 1971, daily (except sunday and Monday) from 11 a.m. till 5 p.m.」、「An art exhibition of new works by Gilbert & George will be held from Wednesday, December 22, 1971, from 11 a.m. till 5 p.m. Private view on Tuesday, December 21, 1971, from 9 till 10 p.m.」、「summer」\* 精神生理学研究所を含む、「nirvana commune」

##### '73/5・〈実務〉と〈実施〉・12人展関係資料（1972～1973年）

- ・『記録帯』No.3, No.4（1972年5月、1973年5月）
- ・'73/5・〈実務〉と〈実施〉・12人展 案内状+封筒2部（1973年5月14～12日、5月14～19日）

## 研究の手法について

研究課題として、次の3点に取り組んだ。

1. 「精神生理学研究所」の作家活動の研究分析
2. 概念芸術に関するメディア論的研究分析
3. 現代芸術における資料研究の手法についての研究分析

2017年2月17日に国立新美術館にて、アーカイブズ学研究における定義と理念について知見を得ることを目的に、研究分担者の鈴木勝雄による「日本における「概念芸術」の射程」、同じく研究分担者である松井茂による「“PURE CONSCIOUSNESS: EXHIBITIONS & PUBLICATIONS”をめぐる」の発表を行った。谷口英理（国立新美術館美術資料室長）、渡部葉子（慶應義塾大学アート・センター教授）からは、それぞれ、アーカイブズ機関としての立場と、コンセプチュアル・アート研究における資料研究の重要性について、コメントがあった。

これらを通じて見えてきたのは、目録のもつ機能、すなわち、情報化のための手段でありながらもそこに発動する意味についてであり、表現としての重要性であった。その一例として、松井より、河原温が60～70年代のコンセプチュアル・アートの活動を経て、90年代後半にどのような印刷物による表現を展開したかについて発表が行われた。河原の所属ギャラリーであるDavid Zwirnerが作成している活動歴の記述方法や書籍の台割から、河原にとってこのシリーズがどのような意義を持っていたのかを考察する試論として、注目される。

2018年には、7月26日、8月22日、9月26日に情報科学芸術大学院大学にて定例会を開催することにより、それぞれの課題に関する議論を深めた。1回目は、研究代表・分担者による発表およびディスカッション、2回目は、原久子（大阪電気通信大学教授）をオブザーバーとし、川崎弘二（電子音楽研究）と伊村、3回目は、成相肇と鈴木勝雄がそれぞれ発表を行った。川崎は、1960～70年代の日本の前衛音楽と題し、小杉武久の活動を中心に発表した<sup>3</sup>。音楽作品を例に、作曲の他、コンサートホールやイベントにおける演奏、ラジオ放送やテレビ番組における演奏、パッケージメディアでの発表を含め、研究対象としての資料の位置づけを知ることができた。鈴木、成相の発表は本紀要の論考へと反映されている。

### ③印刷物を表現媒体とした活動（1975～1996年）

山岸信郎経営画廊関係

- ・『展評』（1975～1980年）＊国立新美術館所蔵の『展評』（資料ID:600000023）には稲憲一郎「佐藤秀治展によせて（展開する像の出来事（event）から生起（eventing）へ）」（56頁）が含まれているが、本資料では欠頁。

宿沢育男（山本育男）関係

- ・『α通信』（1988～1991年）  
1～6号、特集号、新春号、最終号
- ・アルファヒルズ・ギャラリー展覧会案内（1988年7月～12月）  
「ジョン・ケージ レコードコンサート」「パリーベルリンー甲府ー市川大門」「長岡国人展」「カリダス・カルマカール展」「山下強志展」
- ・『甲斐観光』（1992年～1996年）

松澤宥関係

- ・『NIRVANA toward THE FINAL ART』3部（1970年）

水上旬関係

- ・『75 FALL WITH in NAGOYA post documents』（1976年）
- ・『古式汎儀礼派レポト第50号＊願』（1975年）エディション:179/376
- ・『paleo pan RITEs report 65/77 02 02～ through A CO-DEX』（1980年）
- ・『アーカイヴアル ジョイント インフォメーションIQ No.1～12』（1977年1月31日～7月15日）
- ・『シグニファイイング 言語・事物／態度の表明とともに』（1974年）
- ・『STEP AHEAD IN SHIMIZU '76』（1976年）

斎藤俊徳関係

- ・「瀬戸内海を拠点として、今、日本列島各地のメッセージは広島に集合される!!」2部（1972年）

3 参考：「小杉武久 音楽のピクニック」（芦屋市立美術博物館、2017年12月9日～2018年2月12日）